

## 序

橿原の地を觀れば蓋し国の壘区か、行きて都つくるべし——といわれた橿原は、日本建国神話の舞台を形成し、いわゆる縄文・弥生文化の遺跡は、概ね市内全域に分布し、日本有数の古代文化圏として知られています。

さらに、豊かな自然環境に恵まれ、名ぐはし大和三山を鎮めとして、はじめて藤原都城を造営、飛鳥—奈良時代の万葉原風土を今に伝え、日本人の心のふる里となっています。

中世以降、大和武士は各地に台頭、奈良諸社寺と比肩して高度の芸能文化を育成、特に今井町のごときは、中世都市として典型的な発達をみ、数多くの中・近世建築の遺構を残しています。「海」の堺に対し、「陸」の今井として特異経済が繁栄、加えて近世に至っては、大阪と伊勢、京都と吉野を結ぶ大和南部の一枢要地となったわけです。しかしながら、近年、都市文化の流入と共に、開発の激化に伴い、きびしい変容を加えつつあります。この現状に鑑み、地域文化の再確認の必要を痛感、市制三十周年を機とし、改訂市史上梓の運びとなりました。旧市

史刊行以来、驚異的に進捗した学問的成果をまとめ、いわゆる大和学の集大成として後世に伝えたいと思います。

本市史が市民各位の机辺に侍し、地域社会に対する理解を深め、温故知新——将来への指針ともなればまことに幸甚です。

市史調査・編集に際し、御尽力いただいた専門研究家並びに本事業の達成に御快諾・御協力下さった関係諸氏に対し、謹んでお礼申し上げます。今後さらに一層の調査研究を期待し、公刊の言葉とします。

昭和六十二年三月吉日

樞原市長

と楠太郎